Phonics 図鑑 フォニックス・ルール早見表（全98ユニット）

左の色＝ステージ

つづり	音	例	ルール
a	/æ/	apple, ant, alligator, ax, animal	a の基本の音は短母音 /æ/（前舌のかなり広い非円唇母音。日本語の「ア」と「エ」の中間で、あごを大きく下げる）。子音で閉じた強勢音節ではふつう /æ/（cat, apple）、開音節やサイレント e の前では名前読み /eɪ/（acorn, cake）、r の前では /ɑːr/（car）、語末の all や al＋子音では /ɔː/（ball, talk）、w のあとでは /ɑ/ になりやすい（want, wash）。強勢がなければ /ə/ に弱まる（about, banana）。アメリカ英語では鼻音 m, n の前の /æ/ が上がって二重母音ぎみ [eə] になる（man, hand：/æ/ の緊張化）。日本語話者は /æ/・/ʌ/・/ɑ/ をすべて「ア」で代用しがちで、cat-cut-cot の区別が最大の課題。
b	/b/	ball, bat, bed, bee, bear	b は有声両唇破裂音 /b/。ほぼ例外なく /b/ と読み、bb も1つの /b/。英語の語頭の /b/ は声帯振動がほとんど始まらないうちに破裂することが多く、p との区別は主に p の強い気息（帯気音 [pʰ]）が担う。語末の mb（lamb, climb, thumb）では b を読まないが、bomb-bombard のように後ろに音節が続くと b が発音される語もある。debt, doubt の b はラテン語（debitum, dubitare）に似せて15〜16世紀に書き足された綴りで、発音されたことはない。日本語話者は v を b で代用しがち（vest→best）。
c	/k/	cat, cup, car, cow, cake	c は「かたい c」/k/（a, o, u・子音の前・語末：cat, cot, cup, clap, music）と「やわらかい c」/s/（e, i, y の前：city, cent, cycle）の2通りに読む。後者は、後期ラテン語〜古フランス語で前舌母音の前の /k/ が口蓋化（/k/ → /ts/ → /s/）した結果を綴りごと借りたもの。このユニットは /k/ の c だけを扱い、/s/ の c はステージ9で学ぶ。強勢音節の頭の /k/ は強い気息 [kʰ] を伴う。ほかに ocean, special の /ʃ/、cello の /tʃ/（イタリア語）という読みもある。
d	/d/	dog, duck, doll, drum, door	d は有声歯茎破裂音 /d/。舌先を上の歯ぐき（歯の裏より少し後ろ）につけて閉鎖する。ほぼ常に /d/ と読み、dd も1つの /d/。アメリカ英語では母音にはさまれ後ろが弱い音節のとき、t と同じ弾き音 [ɾ] になり（ladder, middle）、ladder と latter がほぼ同音になる。過去形の -ed は直前の音で /t/（jumped）・/d/（played）・/ɪd/（wanted）に読み分ける。日本語話者は語末に母音をつけて「ベッド」としたり、di を「ジ」と読んだりしがちなので注意。
e	/e/	egg, elephant, elbow, elf, end	e の基本の音は短母音 /e/（精密表記では [ɛ]。日本語の「エ」よりやや口が開く）。閉音節の強勢母音ではふつう /e/（bed, egg）、強勢のある開音節では名前読み /iː/（me, even）、強勢がなければ /ə/ や /ɪ/ に弱まる（the, decide）。語末の e は多くが読まない「サイレント e」で、前の母音字を名前読み（いわゆる長母音）にする合図になる（cake, kite）。/e/ は ea（head, bread）、ai（said）、a（any, many）でも綴られる。日本語話者は bed /e/ と bad /æ/ の区別に注意。
f	/f/	fish, fox, frog, fan, feather	f は無声唇歯摩擦音 /f/：上の前歯を下唇の内側に軽く当て、そのすき間で息をこする。ほぼ例外なく /f/ と読み、1音節語の短母音のあとの語末では ff と重ねる（off, cliff, stuff：floss rule。if, of は例外）。同じ /f/ は ph（phone：ギリシャ語由来）や gh（laugh, enough）でも書く。f を /v/ と読むのは of だけと言ってよく、これは弱く読まれる機能語で語末の摩擦音が有声化したため（強く読む形が off として分かれた）。日本語の「フ」は両唇摩擦音 [ɸ] で唇歯音ではないため、food と hood、fan と van の区別に注意。

家庭・教室での印刷は自由です（再配布・販売はご遠慮ください）

フォニックス・ルール早見表（全98ユニット）

つづり	音	例	ルール
g	/g/	goat, gorilla, girl, game, gate	g の基本は「かたい g」＝有声軟口蓋破裂音 /g/（goat, gum, big）。a, o, u・子音の前・語末ではほぼ /g/。e, i, y の前では「やわらかい g」/ʤ/ になることが多い（gem, giant, gym）が、get, give, girl, gift, tiger のように /g/ のままの語も多く、c ほど規則的ではない（get, give は古ノルド語形が定着したもの）。guess, guitar の u は g をかたく読ませるための文字で、発音しない。ng では g が鼻音 /ŋ/ に吸収され（sing）、gn では g を読まない（sign, gnome）。日本語話者は語末に「グ」と母音を添えやすい（big→ビッグ）。
h	/h/	hat, horse, house, hen, hand	h は無声声門摩擦音 /h/：声門で息をこする音で、口の形は次の母音の形になる。音節のはじめ（母音の前）にしか現れず、語末や子音の前では読まない（oh, ah）。母音にはさまれると有声の [ɦ] に近づく（behind, ahead）。sh, ch, th, ph, wh, gh など二重字の2文字目として最もよく使われる。hour, honest, honor, heir はフランス語経由の語で、h が発音されなくなっていた時代に入ったため h を読まない（habit, hotel などは綴りに合わせて h を読むようになった）。日本語の「ヒ」[ç]・「フ」[ɸ] は口の中がせまくなる別の音なので、he を「ヒー」、who を「フー」にしない。
i	/ɪ/	igloo, insect, ink, in, it	i の基本の音は短母音 /ɪ/：日本語の「イ」より舌が低く中央寄りの緩んだ音（弛緩母音）で、「イ」と「エ」の中間に聞こえる。閉音節の強勢母音ではふつう /ɪ/（big, fish, in）、開音節やサイレント e の前では名前読み /aɪ/（ice, kite, tiger）、-ind, -ild, -igh でも /aɪ/ になりやすい（kind, wild, night。ただし wind「風」は /ɪ/）。強勢がなければ /ə/ に弱まることも多い（animal, pencil）。/ɪ/ と /iː/ は長さだけでなく音色（緩み・張り）がちがう対立で、ship–sheep、live–leave の混同は日本語話者の典型的なつまずき。
j	/ʤ/	jam, jar, jet, jellyfish, jelly	j は有声後部歯茎破擦音 /ʤ/ を表し、英語ではほぼ例外なくこの音で読む（唇はやや丸まる）。英語本来の語は j で終わらないため、語末の /ʤ/ は -ge（cage, large）か短母音のあとの -dge（bridge）で書く（raj, hajj などの借用語は例外）。同じ /ʤ/ は e, i, y の前の g（gem, giant）や soldier の di でも表す。j は17世紀ごろ I から分かれて定着した新しい文字で、/ʤ/ の読みは古フランス語から。日本語の「ジ」は語中で摩擦音 [ʑ] になりやすく、英語の破擦音 /ʤ/ と摩擦音 /ʒ/（measure）の区別があいまいになりやすい。
k	/k/	kangaroo, kite, key, king, koala	k は無声軟口蓋破裂音 /k/ で、かたい c と同じ音。綴りの分担はおおまかに、e, i, y の前は k（kit, key, sky）、a, o, u・子音の前は c（cat, cot, cup, clap）、1音節語の短母音の直後の語末は ck（duck）、長母音・二重母音や子音のあとの語末は k（cake, book, milk）。kangaroo, koala, karate, kayak のように a, o の前の k は借用語に多い。強勢音節の頭では気息 [kʰ] を伴い、s のあとでは気息がない（sky）。語頭の kn では k を読まない（knife：17世紀ごろまでに発音されなくなった）。
l	/l/	lion, leaf, lemon, leg, lamp	l は有声歯茎側面接近音 /l/：舌先を歯ぐきにつけたまま、舌の両側から声を流す。母音の前の「明るい L」[l] に対し、語末や子音の前では舌の奥が軟口蓋に向かって盛り上がる「暗い L」[ɫ] になり、ball, milk の l は「ウ」に近く聞こえる（アメリカ英語は母音の前でも比較的暗い）。talk, walk, half, calm などでは l を読まない（15世紀ごろ a のあとの l が母音に溶けこんだなごり）。could の l は would, should に合わせて書き足しただけで、発音されたことがない。日本語のラ行は舌先で一瞬はじく歯茎弾き音 [ɾ] で、l とも r とも異なるため、light–right の対立が難しい。

家庭・教室での印刷は自由です（再配布・販売はご遠慮ください）

フォニックス・ルール早見表（全98ユニット）

つづり	音	例	ルール
m	/m/	monkey, moon, mouse, milk, map	m は有声両唇鼻音 /m/：唇を閉じ、軟口蓋を下げて鼻から声を出す。ほぼ例外なく /m/ と読み、mm も1つの /m/。語末の mb（lamb, climb）では b を、mn（autumn, hymn）では n を読まないが、autumnal, hymnal のように接尾辞がつくと n が発音される。語頭の mn-（mnemonic：ギリシャ語由来）では m を読まない。日本語の「ン」は p, b, m の前では [m] になる（さんぽ・さんま）が、語末の「ン」は口を閉じないため、ham, swim の語末で唇を閉じないと n や鼻母音に聞こえる。
n	/n/	nest, net, nose, nut, nine	n は有声歯茎鼻音 /n/ で、ほぼ例外なく /n/ と読む。k, g の前では調音位置が同化して軟口蓋鼻音 /ŋ/ になり（pink, finger, uncle）、ng は1つの /ŋ/ を表す二重字（sing）。語頭の kn-, gn- では前の文字を読まずに /n/（knee, gnome）、語末の -mn では n を読まない（autumn）。英語の /n/ は舌先を歯ぐきにしっかりつけて閉じる。日本語の語末の「ン」は舌が歯ぐきにつかない口蓋垂鼻音 [ɴ] などになるため、pen, ten をカタカナ式に言うと ng のように聞こえやすい。
o	/ɑ/	octopus, ox, otter, olive, hot	閉音節の o は、アメリカ英語では唇を丸めない後舌の広い母音 /ɑ/（hot, box）で、father の a と同じ音（father–bother の合流）。イギリス英語では唇を丸めた短い /ɒ/ で「オ」に近い。開音節やサイレント e の前では /oʊ/（go, home）。son, mother, love のように /ʌ/ と読む語は、中世の写本で u の縦線が m, n, v の縦線と紛れるのを避けて o と書いたなごりとされる。dog, long, off など g, ŋ, f, s, θ の前では /ɔː/ と読む話者が多いが、cot–caught 合流のある地域では /ɑ/ になり、揺れが大きい。日本語の「オ」は /ɑ/ とも /ɒ/ とも違う。
p	/p/	pig, pen, pan, pin, panda	p は無声両唇破裂音 /p/。強勢音節の頭では強い気息を伴う [pʰ]（pin）で、s のあと（spin）や語末では気息がほとんどない。英語の b は語頭で声帯振動が弱いことも多く、p と b の聞き分けは主にこの気息の有無（VOT の差）に頼っている。ph は /f/ を表す二重字。psychology, pneumonia（ギリシャ語由来の ps-, pn-）や cupboard, raspberry, receipt では p を読まない（receipt の p はラテン語 recepta に似せて後から書き足された綴り）。日本語のパ行は気息が弱めなので、語頭の p は息を強く出すと英語らしくなる。
qu	/kw/	queen, quick, quilt, quiz, quack	英語の q はほぼ必ず u を伴い、qu で /kw/ を表す（queen, quick）。この u は母音ではなく、唇の丸め＝半母音 /w/ として働く。フランス語・スペイン語由来の語では qu が /k/ だけになり（bouquet, conquer, mosquito）、語末の -que も /k/（unique, antique）。u を伴わない q は qi, Qatar, Iraq など借用語・固有名詞に限られる。古英語では /kw/ を cw と書き（cwēn → queen）、ノルマン征服後にフランス語式の qu に置きかわった。日本語話者は /kw/ を「ク・ウ」の2拍にしがちなので、/k/ と同時に唇を丸める。
r	/r/	rabbit, rat, red, ring, rain	r は接近音 /r/（精密には歯茎〜後部歯茎接近音 [ɹ]）。舌先はどこにも触れず、舌先をそり上げる型と舌の奥を盛り上げる型（bunched r）の2通りの作り方があり、どちらも唇の丸めを伴うことが多い。舌先で歯ぐきを一瞬はじく日本語のラ行 [ɾ] とも、舌先をつけたままの l とも異なる。アメリカ英語（r 音性方言）では母音のあとの r も発音され、母音と一体化して r 音性母音になる（car, bird）。wr-（write）と rh-（rhyme）も /r/。日本語には r と l の対立がないため、聞き分け・言い分けの最難関の一つ。

家庭・教室での印刷は自由です（再配布・販売はご遠慮ください）

フォニックス・ルール早見表（全98ユニット）

つづり	音	例	ルール
s	/s/	sun, sock, seal, seven, six	s は無声歯茎摩擦音 /s/ を表すのが基本（sun, bus）。ただし is, has, was, his など機能語の語末、母音にはさまれた位置（rose, music）、有声音のあとの複数形・3単現の -s（dogs）では有声の /z/ になることが多い（母音間でも basic, basin は /s/）。sh は /ʃ/、sugar, sure では s 単独で /ʃ/（/sj/ が融合した結果）、measure, vision では /ʒ/。/s/ は c（city）や sc（science）でも綴られる。日本語の「シ」は歯茎硬口蓋音 [ɕ] で /ʃ/ に近いため、si を「シ」と読むと sit が別の語に聞こえる。
t	/t/	tiger, ten, tent, toe, turtle	t は無声歯茎破裂音 /t/。強勢音節の頭では気息を伴う [tʰ]、s のあとでは気息がない（stop）。アメリカ英語では母音（や r）にはさまれ後ろが弱い音節のとき、有声の弾き音 [ɾ] になり（water, butter, party）、d と同じ音に聞こえる。n のあとでは脱落することもあり（winter が winner に近く聞こえる）、語末や n の前では声門閉鎖音 [ʔ] になることが多い（cat, button）。th は別の音（/θ/, /ð/）、-tion の t は /ʃ/、listen, castle の t は読まない（often は t を読む人もいる）。日本語の「チ」「ツ」に引きずられて ti, tu を [tɕi], [tsu] にしないこと。
u	/ʌ/	umbrella, up, under, uncle, cup	閉音節の u は短母音 /ʌ/（up, cup, sun）：唇を丸めず、口の開きは中くらいで、日本語の「ア」より短い（アメリカ英語ではかなり中舌寄り）。開音節やサイレント e の前では /juː/（unicorn, cute）、r, l, j のあと（アメリカ英語では t, d, n のあとも）では /j/ のない /uː/（rule, June, tune）。put, push, full, bull のように唇音のあとで /ʊ/ を保つ語もある（17世紀の foot-strut 分裂で /ʌ/ に変わらなかった語）。/ʌ/ は son, love の o、blood の oo、touch の ou でも綴られる。日本語話者は u をローマ字式に「ウ」と読みがち。
v	/v/	van, vet, vest, vase, violin	v は有声唇歯摩擦音 /v/ で、f と同じ構え（上の前歯を下唇の内側に軽く当てる）で声帯を振動させる。読み方の例外はほぼない。英語の語は原則として v で終わらず、語末は -ve と書く（have, give, love）：中世には u と v が同じ文字で、語末の v が母音の u と紛れるのを避けたため。そのため have, give, love の e は前の母音を名前読みにするサイレント e として働かない。古英語には v の文字がなく、有声音にはさまれた f が [v] を表していた（wolf–wolves の交替の起源）。日本語には /v/ がないため b で代用しがち（very→berry, vest→best）。
w	/w/	web, wig, wet, wagon, window	w は有声両唇軟口蓋接近音 /w/：唇を丸めると同時に舌の奥を軟口蓋に近づけ、すぐ次の母音へ移る半母音。wh は現代アメリカ英語の大多数の話者で /w/（wine–whine の合流）。wr-（write）の w は読まず、who, whole では wh が /h/。/w/ は one の o（/wʌn/）や qu の u（queen）にも隠れている。w は直後の母音にも影響し、wa は /ɑ/ や /ɔː/（want, water）、wor は /əːr/（work, word）になりやすい。日本語の「ワ」は唇の丸めが弱く、日本語には「ウ」の前の w がないため、wood, woman, wool で w が消えやすい。
x	/ks/	box, fox, six, ax, ox	x はふつう2つの音 /ks/ を1文字で表し、語末（box, six）や子音の前（next, extra）に多い。後ろに強勢のある母音が来ると有声化して /gz/ になる傾向がある（exam, exact, exist。前に強勢がある exercise, excellent は /ks/）。anxious, luxury では /kʃ/。語頭の x はギリシャ語由来の語で /z/（xylophone）。x は原則として重ねて書かない。日本語話者は /ks/ の間に母音を入れて「クス」と2拍にしがち。

家庭・教室での印刷は自由です（再配布・販売はご遠慮ください）

フォニックス・ルール早見表（全98ユニット）

つづり	音	例	ルール
y	/j/	yo-yo, yes, yak, yarn, yell	語頭（音節のはじめ）の y は有声硬口蓋接近音 /j/ を表す子音（yes, yellow）。語末や音節末では母音字として働き、強勢のある1音節語の語末では /aɪ/（my, sky）、2音節以上の語末では弱い /iː/（happy。辞書では /i/）、閉音節の語中では /ɪ/（gym, myth）。/j/ は use, cute の u（/juː/）や onion の i、few の ew にも含まれる。日本語話者には year と ear、yeast と east の区別が難しい：/j/ は舌の前のほう（前舌面。舌先ではなく、その少し後ろ）を硬口蓋に近づけた「ィ」から始まる。
z	/z/	zebra, zoo, zero, zip, zipper	z は有声歯茎摩擦音 /z/（s と同じ構えで声帯を振動させる）。英語の /z/ は z より s で綴られることのほうがはるかに多い（is, has, rose, dogs）。語末では zz と重ねることが多い（buzz, fizz, jazz）。pizza の zz は /ts/（イタリア語）、azure, seizure の z は /ʒ/。語末の /z/ は声帯の振動が途中で弱まる（部分的に無声化する）ため、s との聞き分けでは直前の母音が長めに聞こえることが大きな手がかりになる（rise /z/ と rice /s/）。日本語の「ズ」は語頭で破擦音 [dz] になりやすい。
a	/æ/	cat, hat, bat, rat, mat	子音＋短母音＋子音（CVC）の語は閉音節なので、母音字が短母音（a ＝ /æ/）になる最も基本の型。1音ずつ発音してつなぐ「ブレンディング（音の合成）」で読み、Ehri の発達段階でいう「完全アルファベット段階（full alphabetic phase）」への入口にあたる。語頭の子音（onset：頭子音）だけを入れかえ、母音＋語末子音（rime：韻）を共有するワードファミリー（c-at, h-at, b-at）で練習すると、韻をひとかたまりで読めて効率がよい。/æ/ を日本語の「ア」で代用すると cut /ʌ/・cot /ɑ/ と区別できない。
e	/e/	net, jet, pet, wet, vet	子音＋短母音 e＋子音の CVC 語。閉音節の e は短母音 /e/（精密表記では [ɛ]）。bell, well などの -ell 語は4文字だが音は3つ：1音節語で短母音のすぐあとの語末の f, l, s, z は重ねて書く（floss rule。if, yes, gas, bus などは例外）。重ねた ll は1つの /l/ なので、「文字の数＝音の数」ではないことに気づかせるよい教材になる。gem は e の前の g がやわらかい /dʒ/ になる例。日本語の「エ」は /e/ にかなり近いが、pen /e/ と pan /æ/ の区別には意識が必要。
i	/ɪ/	sit, hit, kit, bit, pin	子音＋短母音 i＋子音の CVC 語。閉音節の i は短母音 /ɪ/：日本語の「イ」より舌の位置が低く中央寄りの緩んだ音（弛緩母音 lax vowel）で、長母音 /iː/（ee, ea）とは長さだけでなく音色がちがう。/ɪ e æ ʌ ʊ/ のような弛緩母音は強勢のある語末に立てないため、これらの短母音の1音節語は子音で終わる（CVC になる理由）。-ill は4文字で音は3つ。ship–sheep, sit–seat の最小対で、長さより音色の差を聞き取る練習が効果的。
o	/ɑ/	hot, pot, dot, got, not	子音＋短母音 o＋子音の CVC 語。アメリカ英語では閉音節の o は唇を丸めない /ɑ/（口を大きく開けた「ア」）で、イギリス英語の /ɒ/（唇を丸めた短い「オ」）とは大きくちがう。-og の語は揺れが大きく、dog は辞書の代表形が /dɔːg/、log, fog, hog なども /ɑ/ と /ɔː/ の両方が聞かれる（cot–caught 合流の有無による）。日本語話者は「オ」で読みがちなので、hot–hat–hut（/ɑ/–/æ/–/ʌ/）を口の開き方で言い分ける練習が有効。

家庭・教室での印刷は自由です（再配布・販売はご遠慮ください）

フォニックス・ルール早見表（全98ユニット）

つづり	音	例	ルール
u	/ʌ/	nut, cut, hut, but, bug	子音＋短母音 u＋子音の CVC 語。閉音節の u は /ʌ/：唇を丸めず、口の開きは中くらいの短い「ア」（アメリカ英語ではかなり中舌寄り）。ローマ字読みの「ウ」にならない点が最大の注意点。put, push, bull, full のように唇音のあとで /ʊ/ を保つ語があるのは、17世紀に /ʊ/ が /ʌ/ に変わった foot-strut 分裂を免れたため。/ʌ/ は強勢のある音節にしか現れず、弱い音節では同じあたりの音が /ə/ になる。
sh	/ʃ/	ship, shop, shell, sheep, shoe	sh は1つの音 /ʃ/（無声後部歯茎摩擦音）を表す二重字。英語の /ʃ/ は唇を丸めて突き出し、舌の前部を歯ぐきの少し後ろに近づける。日本語の「シ」は舌の中央が硬口蓋に近づく歯茎硬口蓋音 [ɕ] で唇も丸めないため、she がずれて聞こえる。語頭・語末に多く（ship, fish）、語中の /ʃ/ は -tion, -cian, -ssion, -cious（nation, musician, mission, delicious）など別の綴りがほとんど。古英語では sc と書いた（scip → ship）。mishap のように形態素の境界をまたぐ s+h は /s/＋/h/。
ch	/tʃ/	chick, chin, chip, cheese, cherry	ch は無声後部歯茎破擦音 /tʃ/ を表す二重字（舌先を歯ぐきの後ろにつけて閉鎖し、/ʃ/ の構えで開放する。唇は丸める）。語頭・語末とも現れるが、1音節語の短母音の直後の語末では tch と書くのがふつう（catch, watch。rich, much, such, which は例外）。ch の読みは語源で分かれ、英語本来語や古フランス語由来は /tʃ/（church, chair）、ギリシャ語由来は /k/（school, chorus）、近代フランス語由来は /ʃ/（chef, machine）。日本語の「チ」[tɕ] は唇を丸めないので、ch は唇を少し突き出すと英語らしくなる。
th	/θ/	thumb, three, thin, thick, think	th は歯摩擦音（dental fricative）で、無声 /θ/ と有声 /ð/ の2通りに読む。舌先を上の前歯の先〜裏に軽く当て（歯の間から少しのぞかせてもよい）、そのすき間で息をこする。舌を歯で「かむ」と息の通り道がふさがって t に近づくので注意。内容語（名詞・動詞・形容詞）の語頭（thumb, think）や語末（bath, mouth）はほとんど /θ/。古英語では /θ/ と /ð/ は1つの音の変種で、有声音にはさまれると [ð] になったため、bath /θ/–bathe /ð/、breath–breathe のような名詞と動詞の交替が残っている。日本語話者は s で代用しがち（think→sink, thick→sick）。
th	/ð/	this, that, the, they, there	th の有声音 /ð/（有声歯摩擦音）。the, this, that, they, then, there など機能語（冠詞・代名詞・指示詞・副詞・接続詞）の語頭はほぼすべて /ð/（through は例外的に /θ/）：これらの語は文中で弱く読まれるため中英語期に有声化したと考えられている。ほかに母音にはさまれた位置（mother, weather, other）や語末の -the（breathe, bathe, clothe）でも /ð/。会話の /ð/ は摩擦が弱く、in the の th が前の n に同化することもある。日本語話者は z や d で代用しがちで、then が zen、they が day に聞こえる。
wh	/w/	whale, wheel, white, whistle, whiskers	wh はアメリカ英語の大多数の話者で /w/ と読む（wine と whine が同音：wine–whine の合流）。what, when, where, which, why など疑問詞に多い。古英語では hw と書き（hwæt → what）、本来は息を先に出す [hw]（無声の [ʍ]）で、アメリカ南部の一部やスコットランド、アイルランドには今もこの発音が残る。who, whom, whose では後ろの円唇母音に w が吸収されて /h/ になった。whole はもともと hāl（hale, heal と同語源）で、15世紀ごろ wh の綴りが加わっただけ。日本語の「ホワイト」式に「ホ」をつけない。

家庭・教室での印刷は自由です（再配布・販売はご遠慮ください）

Phonics 図鑑 フォニックス・ルール早見表（全98ユニット）

左の色＝ステージ

つづり	音	例	ルール
ph	/f/	phone, photo, dolphin, elephant, alphabet	ph は /f/ を表す二重字で、主にギリシャ語由来の語（phone, photo, graph, dolphin）に現れる。古典ギリシャ語の φ はもともと気息を伴う [pʰ] だったため、ローマ人はラテン文字で ph と書き写した（θ, χ を th, ch と書いたのも同じ）。のちに [f] に変わり、綴りだけが残った。fantasy, frenzy のように f に書きかえられた語もある。shepherd（sheep＋herd）、uphill のように形態素の境界をまたぐ p＋h は ph ではない。Stephen では例外的に /v/。
ck	/k/	duck, sock, clock, rock, back	ck は /k/ を表す二重字（2文字で1つの音）。1音節語の短母音の直後の語末（duck, sock, back）と、2音節語で短母音の直後に /k/ が来るとき（rocket, pocket, ticket）に使う。長母音・二重母音や子音のあとでは k（cake, book, milk, bank）、語頭には現れない。短母音のあとの子音を2文字で書いて音節を「閉じる」点で、ff, ll, ss, tch, dge と同じ原理。2音節以上の語の語末の /k/ はふつう c（picnic, music, attic）。
ng	/ŋ/	ring, king, song, wing, swing	ng は軟口蓋鼻音 /ŋ/（舌の奥を軟口蓋につけ、鼻から声を出す）を表す二重字で、語末（ring, song）や -ing に多い。英語では /ŋ/ は語頭に立たない。語中では形態素の構造が手がかりになり、語根の末尾の ng は /ŋ/ のまま（sing-er, hang-ing）、1つの形態素の内部では /ŋg/（finger, hunger, single, English）。ただし比較級・最上級の longer, stronger, younger は例外的に /ŋg/。日本語の「ン」も「銀行」のように k, g の前では [ŋ] になるが、king を「キング」と /g/ まで言い切らないことが大切。
nk	/ŋk/	pink, ink, sink, wink, drink	nk は /ŋk/ と読む。k の前の n は調音位置が同化して軟口蓋鼻音 /ŋ/ になるため、ここでは nk を1単位として扱う（ink, bank, think, junk）。ng と違って k ははっきり発音される（sing /sɪŋ/ ⇔ sink /sɪŋk/）。nc（uncle）、nch（anchor）、nx（lynx）、nq（banquet）でも同じ /ŋk/。接頭辞 un-, in- のあと（unkind, income）では /n/ と /ŋ/ の両方が聞かれる。日本語の「ン」も k の前では [ŋ] になるので発音しやすいが、カタカナ式に「ク」の母音をつけないこと。
bl cl fl gl pl sl		black, block, blink, blush, blanket	子音＋/l/ の連続（L ブレンド。子音連結 consonant cluster）。二重字（sh, ch など）と違い、2つの子音はそれぞれ自分の音を保ったまま、あいだに母音をはさまずに続けて発音する（flag ＝ /f/＋/l/）。語頭では bl, cl, fl, gl, pl, sl の6種が代表的で、/tl/ /dl/ は英語の語頭に現れない（そのため atlas は at-las と切れる）。p・k の後の /l/ は無声化しやすく（play, clock の l は息の音に近い）、日本語話者には聞き取りにくい。日本語話者は l と r の区別に加え、子音のあいだに母音を入れて「プ・レイ」と拍を増やしやすい。
br cr dr fr gr pr tr		brick, brush, bring, crab, crib	子音＋/r/ の連続（R ブレンド）。br, cr, dr, fr, gr, pr, tr の7種が語頭に多く、2つの子音はどちらも自分の音を保ったまま、母音をはさまずにつなげる。s や二重字が前に付いた str, spr, scr, thr, shr もある（英語本来の語では /sr/ は語頭に立たず、shr がその位置を埋める）。p・t・k の後の /r/ は無声化し（pray, try）、さらに tr・dr では t・d が r の構えに引かれて後部歯茎の破擦音 [tʃ] [dʒ] に近づく。日本語話者は /r/ をラ行の弾き音で代用したり、l と混同したりしやすい（pray / play、grass / glass）。

家庭・教室での印刷は自由です（再配布・販売はご遠慮ください）

フォニックス・ルール早見表（全98ユニット）

左の色＝ステージ

つづり	音	例	ルール
sc sk sm sn sp st sw		scan, skip, skin, skunk, skill	s＋子音の連続（S ブレンド）。sc, sk, sm, sn, sp, st, sw が語頭に多い。/sk/ は a・o・u や子音の前では主に sc（scan, scuff, scrub）、e・i・y の前では sk（skin, skill, sky）と書き分ける（scene のように c が /s/ になるのを避けるため）。古英語の sc は /ʃ/ と読まれた（scip → ship）ので、sky, skin, skirt など /sk/ の語の多くは古ノルド語からの借用で、shirt と skirt は同じ語源の英語形と北欧語形にあたる。日本語話者は s のあとに母音を入れて「ス・ター」と拍を増やしやすい。
-nd -nt -mp -st -sk -lk -ft		hand, sand, pond, wind, bend	語末の子音連続（final blends）。-nd, -nt, -mp, -st, -sk, -lk, -ft などで、2つの子音をどちらも発音する。-nd・-nt（歯茎）や -mp（両唇）は、鼻音と閉鎖音が同じ調音位置で作られる組み合わせ（同器官的 homorganic）なので、口の形を変えずに続けられる。-lk の l は母音のあとの「暗い L」[ɫ] で、日本語話者には milk が「ミウク」のように聞こえやすい。また -nd・-ld の前では find, kind, child, wild のように i が長く /aɪ/ になる語群がある（古英語末期の同器官的長音化の名残）。
str spr scr spl squ thr shr		string, stretch, strap, strip, spring	3子音の連続。英語の語頭の3子音連続は基本的に /s/＋無声閉鎖音（p, t, k）＋接近音（l, r, w, j）の形になる（str, spr, scr, spl, squ ＝ /skw/、ほかに spew の /spj/、skew の /skj/）。組み合わせはさらに限られ、/stl/ や /spw/ などは現れない（sphragistics の /sfr/ のような、ごくまれな借用語は別）。thr と shr は二重字＋r なので、文字は3つでも音は2つ（/θr/, /ʃr/）。s のあとの p・t・k は息を伴わない無気音になる。日本語話者は「ス・ト・リ・ン・グ」と各子音に母音を足しがち。
a_e	/eɪ/	cake, lake, snake, game, gate	a＋子音1つ＋語末 e（VCe パターン、サイレント e）で、a はフォニックスでいう long a、音声学的には二重母音 /eɪ/（文字の名前読み）になり、語末の e は発音しない。cap→cape, tap→tape, mad→made と短母音の語と対にすると分かりやすい。歴史的には、中英語で開いた音節の母音が長くなり（開音節長音化）、その後語末の e が発音されなくなったため、e が「前の母音は長い」という目印として残った。Clymer（1963）が初等読本の約2,600語で調べたところ、「語末 e の前の母音は長い」という規則の当てはまりは63%で、have, are, come, done などの頻出語に例外が多い。語末 e は rice, page の c・g をやわらかく読ませる役目や、have のように語末の v を避ける役目も兼ねる。
i_e	/aɪ/	kite, bike, five, nine, pine	i＋子音1つ＋語末 e で、i はフォニックスでいう long i、音声学的には二重母音 /aɪ/（名前読み）になり、e は発音しない。kit→kite, pin→pine, rid→ride などの対が作れる。give, live のように v で終わる語は例外が多い（英語では語末に v を書かない習慣があり、短母音でも e が付くため）。machine, police の i が /iː/ なのは、大母音推移が進んだ後にフランス語から入った語で、古い読みのまま残ったため。日本語話者は /aɪ/ を「ア・イ」と同じ強さの2拍で言いがちだが、英語では「ア」が核で「イ」は軽いわたり。
o_e	/oʊ/	bone, home, rose, nose, hole	o＋子音1つ＋語末 e で、o はフォニックスでいう long o、音声学的には二重母音 /oʊ/（名前読み）になり、e は発音しない。hop→hope, not→note, rob→robe の対が作れる。m・n・v の前では come, some, love, done のように /ʌ/ になる頻出の例外がある。come, some, love（古英語 cuman, sum, lufu）はもともと短い u の語で、中世の写字生が u と m・n・v（当時 v は u と同じ文字）の縦線の連続を読みやすくするため o と書いた名残。done, none は長い o・a が後に短くなった別の経緯をもつ。日本語話者は /oʊ/ を「オー」と長音で代用しがち。

家庭・教室での印刷は自由です（再配布・販売はご遠慮ください）

Phonics 図鑑 フォニックス・ルール早見表（全98ユニット）

左の色＝ステージ

つづり	音	例	ルール
u_e	/juː/ /uː/	cube, mule, cute, huge, use	u＋子音1つ＋語末 e で、u は長母音になり e は発音しない。基本は /juː/（cube, mule, cute）で、これは中英語の /iu/（フランス語の u などに由来）が変化したもの。r の後や「子音＋l」の後（rule, flute, include）では17世紀ごろ /j/ が落ちて /uː/ になり（ヨッド脱落 yod-dropping）、アメリカ英語ではさらに t・d・n・s など歯茎音の後（tube, dune, tune）でも /j/ が落ちる。日本語話者は /uː/ を唇の丸めが弱い「ウー」で代用しやすい。
e_e	/iː/	these, centipede, theme, scene, delete	e＋子音1つ＋語末 e で、前の e は長母音 /iː/（名前読み）になり、語末の e は発音しない（these, theme, complete）。マジック e の5パターンの中で最も語数が少ない。英語本来の語の /iː/ は中英語以来 ee（meet）や ea（meat）で書くのがふつうになったため、e_e は complete, extreme, theme のようなラテン語・ギリシャ語系の借用語に偏っている。there, where, were など頻出語が例外になり、here は r の影響で /ɪər/ になる。
ai	/eɪ/	rain, train, snail, tail, nail	ai は /eɪ/ を表す母音チーム（vowel team）。主に語頭・語中に現れ（aim, rain, paint）、語末の /eɪ/ には通常 ay を使う（play）。もとは中英語の二重母音 /ai/ で、17世紀ごろ a_e の長母音と合流したため（pane–pain merger）、tale / tail、male / mail、plane / plain のような同音異綴語が多い。Clymer（1963）では「ai, ea, oa, ui は前の母音が長く後ろは黙字」という規則の当てはまりが66%。強勢のない音節では mountain, captain のように /ə/ に弱まり、r の前では /eər/（chair）になる。
ay	/eɪ/	play, day, say, way, hay	ay は /eɪ/ を表す母音チームで、主に語末や音節末に使う（day, play, crayon）。英語には語末に i を置かない慣習があるため、語中は ai・語末は ay という位置による書き分け（positional spelling）の典型で、oi / oy、ei / ey も同じ関係にある。例外は少なく、says /sez/、quay /kiː/、外来語の kayak（/aɪ/）など。日本語話者はカタカナ語の影響で「デー」「プレー」と長母音で言いやすい。
ee	/iː/	tree, bee, see, three, feet	ee はほぼ常に /iː/ を表す、規則性が非常に高い母音チーム（Clymer 1963 では「ee は長い e」の当てはまりが98%）。語頭・語中・語末のどこにも現れる（eel, feet, tree）。中英語の ee は狭い長母音 /eː/ で、大母音推移で /iː/ になった（ea の広い /ɛː/ とは別の音だった）。例外は been（米 /bɪn/）、r の前で /ɪər/ になる deer, cheer、強勢のない coffee, committee の弱い /i/ 程度。日本語話者は /iː/ と /ɪ/ を長さだけで区別しがちだが、/ɪ/ は舌がやや低く中寄りの別の母音。
ea	/iː/	leaf, sea, tea, eat, read	ea は /iː/ が最も多い読み方（leaf, sea, eat）。ただし /e/（bread, head）もかなり多く、/eɪ/ は great, break, steak にほぼ限られる。中英語の ea は広い長母音 /ɛː/ で、ee の狭い /eː/ とは別の音だったが、17世紀ごろ /iː/ に合流した（meat–meet merger）。この合流をまぬがれたのが great 類、それより前に短くなったのが head 類。初めて見る語ではまず /iː/、通じなければ /e/ を試す（読みの柔軟性 set for variability）のが実用的。

フォニックス・ルール早見表（全98ユニット）

つづり	音	例	ルール
oa	/oʊ/	boat, goat, coat, road, toad	oa はほぼ常に /oʊ/ を表す母音チーム。語頭・語中に現れ（oak, boat）、語末にはほとんど来ない（語末の /oʊ/ は ow, o, oe が担当し、cocoa は例外的）。oa は16世紀ごろ広まった綴りで、中英語の広い長母音 /ɔː/（boat）を狭い /oː/（boot → oo）と書き分けるために使われた。r の前では /ɔːr/（board, roar）、broad は /ɔː/ になる例外。日本語話者が「ボート」「コート」と長音で言うと、/ɔː/ の bought, caught に近く聞こえる。
ow	/oʊ/	snow, bow, bowl, grow, blow	ow は /oʊ/（snow, grow）と /aʊ/（cow, now）の2通りに読まれ、綴りだけでは判断できない（Clymer 1963 でも「ow は長い o」の当てはまりは59%）。/oʊ/ は語末、とくに -ow で終わる2音節語（yellow, window, follow）や、known, grown, shown のような過去分詞の -own に多い。2つの読みは由来が違い、/oʊ/ は古英語の snāw, grōwan などの母音＋w、/aʊ/ は古英語の長い ū（cū → cow, nū → now）が大母音推移で二重母音になったもの。bow, row, sow は読み方で意味が変わる同綴異義語。
igh	/aɪ/	light, night, high, right, fight	igh は3文字で /aɪ/ を表す三重字（trigraph）で、gh は発音しない。語末（high, sigh）か t の前（light, night）にほぼ限られ、igh 自体の読みには例外がほとんどない。Clymer（1963）では「i＋gh は長い i」の当てはまりが71%だが、これは eight, neighbor のような eigh の語も対象に入るため。gh はもともと摩擦音で、この音が消えるときに前の短い i が長くなり（代償延長）、のちに大母音推移で /iː/ → /aɪ/ と変わった。
ie	/aɪ/	pie, tie, tied, lie, cried	ie は短い語の語末で /aɪ/ を表す（pie, tie, lie）。y で終わる動詞・名詞に -s / -ed が付くと y が ie に変わり（cry → cries, cried）、そこでも /aɪ/ と読む。一方 field, chief, piece では /iː/、多音節語の語末（cookie, puppies）では弱い /i/、friend では /e/ になり、読みの揺れが大きい綴り（Clymer 1963 では「ie は長い e」の当てはまりがわずか17%）。/iː/ の ie には chief, piece のようなフランス語系の語が多い。
ue	/uː/ /juː/	glue, blue, true, clue, blueberry	ue は主に語末で /uː/（blue, glue, true）または /juː/（cue, rescue, value）を表す。英語には語を u で終えない慣習があり、そのため e が添えられている。r や「子音＋l」のあとでは /uː/、米語では t, d, n のあとも /uː/ になりやすい（due, avenue）。statue, issue では /tj/ /sj/ が融合して /tʃuː/ /ʃuː/ になる（ヨッド融合）。-gue（tongue, league）の ue は g を硬く読ませるための黙字で音を持たず、フランス語式の綴りの影響を受けたもの。
ew	/uː/ /juː/	screw, new, chew, blew, flew	ew は主に語末で /uː/（screw, chew, grew）または /juː/（few, nephew）を表す。r, l, ch, j のあとでは /uː/。米語では n, d, t, s のあとも /uː/ がふつう（new /nuː/）だが、英国では /njuː/ と言う。Clymer（1963）で「ew は oo と同じ音」の当てはまりが35%と低いのは、few, new などの /juː/ を外れとして数えたためと考えられる。w は u を重ねた文字なので、ew は eu（feud, neutral）の語末形にあたる。sew /soʊ/ は例外。

家庭・教室での印刷は自由です（再配布・販売はご遠慮ください）

フォニックス・ルール早見表（全98ユニット）

つづり	音	例	ルール
oo	/uː/	moon, food, zoo, spoon, boot	oo は長母音 /uː/（moon, food）と短母音 /ʊ/（book, foot）の2通りに読まれ、/uː/ のほうが語数は多い。語末（zoo, too）や m, n, l, th, s の前で /uː/ になりやすく、k の前（book, look, cook）ではほとんど /ʊ/（spook は例外）、d の前は food / good と分かれる。中英語の狭い長母音 /oː/（だから o を重ねて書いた）が大母音推移で /uː/ になり、一部の語がその後短くなって /ʊ/ や /ʌ/（blood）になった。room, roof のように地域で揺れる語もあり、最後は語ごとに覚えるのが確実。
oo	/ʊ/	book, foot, good, cook, look	oo の短母音 /ʊ/。-ook（book, look, cook, took）、-ood（good, wood, stood）、foot, wool などに現れる。どれも中英語で /oː/ → 大母音推移で /uː/ になった語が、近世英語期にさらに短くなったもの。短くなる時期が早かった blood, flood は、その後の /ʊ/ → /ʌ/ の変化（FOOT–STRUT 分裂）に巻き込まれて /ʌ/ になった。/ʊ/ は /uː/ より舌の位置が低く中寄りで、唇の丸めもゆるい弛緩母音。日本語話者はどちらも「ウ」で代用して長さだけで区別しがち（full / fool、pull / pool）。
ou	/aʊ/	house, mouse, mouth, cloud, out	ou の最も一般的な読みは二重母音 /aʊ/（house, out, cloud）。語頭・語中に現れ、語末の /aʊ/ はふつう ow で書く（cow, now）。ou はノルマン征服後に写字生が持ちこんだフランス式の綴りで、もとは中英語の長い /uː/（古英語 hūs → hous）を表した。大母音推移でこの /uː/ が /aʊ/ になったのが house 類で、フランス語から遅れて入った soup, group は /uː/ のまま。ほかにも touch /ʌ/、four /ɔːr/、could /ʊ/、soul /oʊ/ など、読みの種類が非常に多い綴り。
ow	/aʊ/	cow, owl, down, brown, clown	ow は /aʊ/（cow, town）と /oʊ/（snow, grow）の2通りに読まれ、どちらになるかは綴りからは決まらないので語ごとに覚える。/aʊ/ の ow は語末（cow, now）や n, l, d の前（town, owl, crowd）によく現れるが、-own は known, grown, shown, own のように /oʊ/ のことも多く、owl /aʊ/ と bowl /oʊ/ のような紛らわしい対もある。/aʊ/ の ow は古英語の長い ū（cū → cow、nū → now）が大母音推移で二重母音になったもので、ou と同じ音の語末形にあたる。bow, row, sow は意味によって両方の読みがある。
oi	/ɔɪ/	coin, oil, point, noise, voice	oi は二重母音 /ɔɪ/ を表す。語頭・語中に現れ（oil, coin, point）、語末や母音の前では oy と書くのが原則（boy, toy, royal）。読みの例外はきわめて少なく、choir /waɪ/、強勢のない tortoise の /ə/、doing のような音節の切れ目くらい。日本語話者は「オ・イ」と同じ強さの2拍で言いがちだが、英語では「オ」が核で「イ」へすべる1音節。
oy	/ɔɪ/	boy, toy, joy, oyster, cowboy	oy は oi と同じ二重母音 /ɔɪ/ を表す。英語では i を語末に置かない慣習があるため、語末と母音の前では oy（boy, enjoy, royal, voyage）、子音の前では oi（coin, point）と位置で書き分けるのが基本（ai / ay と同じ関係。oyster, boycott のように子音の前の oy も少数ある）。royal と regal、loyal と legal のように、同じラテン語から古フランス語経由で入った語（oy）と直接入った語が並ぶ例もある。読みの例外はごく少なく、buoy, coyote などに限られる。

家庭・教室での印刷は自由です（再配布・販売はご遠慮ください）

つづり	音	例	ルール
au	/ɔː/	sauce, autumn, astronaut, dinosaur, sausage	au は /ɔː/ を表す母音チーム（sauce, autumn, launch）。語頭・語中に現れ、語末には来ない（語末の /ɔː/ は aw：saw, paw）。augh（caught, daughter）も同じ音になる。ラテン語・フランス語から入った語の au はもと二重母音 /au/ で、近世英語期に単母音 /ɔː/ に変わった。Clymer（1963）では「a は l, w, u の前で /ɔː/」の当てはまりが48%。aunt, laugh は /æ/、gauge は /eɪ/ の例外。アメリカ英語では cot-caught 合流で /ɑː/ と言う話者も多いが、辞書の代表形は /ɔː/。
aw	/ɔː/	saw, paw, jaw, straw, draw	aw は au と同じ /ɔː/ を表す。語末（saw, paw, draw）と、n, l, k の前（lawn, crawl, hawk）に現れるのが典型で、それ以外の語中では au が使われる（語末に u を置かない慣習による書き分け）。saw, draw などは、古英語の sagu, dragan の g が中英語で w の音に変わった語。読みの例外は少ない（away, awake は a と w が別の音節）。日本語話者は /ɔː/ を日本語の「オー」で代用しがちだが、英語の /ɔː/ は口をたてに大きく開け、唇の丸めは控えめ。
ea	/e/	bread, head, feather, sweater, breakfast	ea の大半は /iː/（leaf, eat）だが、一部の語では短母音 /e/ になる（bread, head, weather）。特に d・th・v・「l＋子音」・-sure の前（-ead, -eath, -eather, -ealth, -easure）に多い。これは中英語の長い /ɛː/ がこれらの子音の前で近世英語期までに短くなったためで、綴りは長母音時代のまま残った。ea はほかに /eɪ/（great）、/ɪər/（ear）、/eər/（bear）、/əːr/（learn）、/ɑːr/（heart）とも読まれ、最も読み分けの難しい綴りの一つ。read（現在 /iː/・過去 /e/）や lead（導く /iː/・鉛 /e/）のように、同じ綴りで両方の読みを持つ語もある。
ar	/ɑːr/	car, star, jar, farm, park	ar は強勢のある音節で /ɑːr/ を表す（car, farm, garden）。r が後ろにつくと a は短音 /æ/ でも名前読み /eɪ/ でもない音になる（R 支配母音 r-controlled vowel。Clymer 1963 の「r は前の母音を長くも短くもない音にする」の当てはまりは78%）。ただし w の後では /ɔːr/（war, warm）、強勢のない音節では /ər/（dollar, sugar）、ar の後に母音が続くと /ær/ や /er/（carrot, parent）になりやすい。日本語話者は「アー」で r の響きが消えやすく、heart / hurt、far / fur、barn / burn の区別がつきにくい。
or ore	/ɔːr/	fork, corn, horse, storm, horn	or と ore はどちらも強勢のある音節で /ɔːr/ を表す（fork, corn / store, more）。ore の e はマジック e に見えるが o を /oʊ/ にはせず、全体で /ɔːr/ になる。w の後では /əːr/ になる語が多い（word, work, world, worm, worth）。中英語のころ w の後の母音が /u/ に変わり（つづりは o のまま）、その /ur/ がのちに er・ir・ur と同じ /əːr/ に合流したためとされる。ただし wore, worn, sword は /ɔːr/ のまま。強勢のない音節では弱い /ər/（doctor, color）。日本語話者は「オー」で r の響きが抜けたり、/ɔːr/ と /ɑːr/（cord / card、form / farm）を混同したりしやすい。
er	/əːr/	tiger, letter, sister, mother, butter	er は強勢のある音節では /əːr/（her, term, person）、強勢のない音節、特に語末の -er では弱い /ər/（tiger, letter, teacher）になる。どちらも舌全体が r の構えをとる R 音化母音（米音の辞書では /ɝ/ と /ɚ/）で、違いは主に強勢と長さ。語末の -er は「〜する人」「より〜」（teacher, bigger）を表す接尾辞として非常に多い。後ろに母音が続くと /er/（very, berry）。中英語後期には er が ar に変わった語があり、綴りも変わったもの（sterre → star、ferme → farm）と綴りが残ったもの（sergeant、英 clerk）がある。

Phonics 図鑑 フォニックス・ルール早見表（全98ユニット）

左の色＝ステージ

つづり	音	例	ルール
ir	/əːr/	bird, girl, shirt, skirt, first	ir は er, ur と同じ /əːr/ を表す（bird, girl, first）。中英語では i・e・u の別々の母音だったが、17世紀ごろ r の前で1つに合流したため、どの綴りを使うかは音からは決まらず、語ごとに覚える必要がある。ire は /aɪər/（fire）、ir の後に母音が続くと /ɪr/（mirror, spirit）。日本語話者は bird を「バード」と /ɑːr/ で言いがちで、bard と区別されない。
ur	/əːr/	nurse, turtle, purple, purse, turn	ur は er, ir と同じ /əːr/（nurse, turn, church）。強勢のない音節では弱い /ər/ になる（surprise、murmur の2つ目）。ur の後に母音が続くとき、米音では hurry /ˈhəːri/ のように /əːr/ のままだが、英音では /ʌr/。ure の形では /jʊər/（pure, cure）や /ʊər/（sure）と読みが変わり、sure は米音で /ʃəːr/ とも発音される。bury /ˈberi/ は、綴りは西部方言の形、発音は南東部（ケント）方言の形という混成の例外。
air are	/eər/	chair, hair, air, stairs, airplane	air と are はどちらも /eər/ を表す（chair, hair / care, share）。are は a_e の子音の位置に r が来た形で、名前読みの /eɪ/ が r の前で変化して /eər/ になったもの（Clymer 1963 の「a＋r＋語末 e は care の音」の当てはまりは90%）。ear（bear）、ere（where）、eir（their）も同じ音を表す。ただし動詞の are は /ɑːr/ と読む例外。米音の /eər/ は実際には [ɛə̯]〜[ɛr] に近く、Mary・marry・merry を同じ発音にする話者も多い。日本語話者は「エ・ア・ー」と3拍にしやすい。
ear eer	/ɪər/	ear, deer, beard, hear, near	ear と eer はどちらも /ɪər/ を表す（ear, hear / deer, cheer）。eer はほぼ例外なく /ɪər/ だが、ear は bear, pear, wear, swear で /eər/、early, learn, earth で /əːr/、heart, hearth で /ɑːr/ になり、読み分けが多い。bear 類は great と同じく /iː/ への変化をまぬがれた語、heart は star と同じ er → ar の変化を受けたのに綴りが残った語。米音の /ɪər/ は実際には [ɪə̯]〜[ɪr] に近い。
ce ci cy	/s/	city, rice, ice, mice, face	c は直後に e, i, y が来ると /s/（soft c）、それ以外（a, o, u, 子音, 語末）では /k/（hard c）になる。英語の綴りの中でもかなり信頼度の高い規則で、例外は cello（/tʃ/）や soccer など少数。語末の -ce（dance, prince）の e は読まず、c を /s/ に保つ目印として働く。
ge gi gy	/dʒ/	giraffe, gem, cage, giant, page	g は直後に e, i, y が来ると /dʒ/（soft g）になりやすく、それ以外では /g/（hard g）。ただし get, give, gift（古ノルド語由来またはその影響）、begin（古英語）、girl（語源不詳）のように、フランス語・ラテン語経由でない日常語には e, i の前でも /g/ のままのものが多く、soft c ほど信頼できない規則。語末の -ge は（beige, garage などフランス語の /ʒ/ を除き）ほとんどの場合 /dʒ/ になる。

家庭・教室での印刷は自由です（再配布・販売はご遠慮ください）

フォニックス・ルール早見表（全98ユニット）

つづり	音	例	ルール
kn	/n/	knife, knee, knock, knot, know	語頭の kn- では k を発音せず /n/ だけを読む。現代英語ではこの規則にほぼ例外がなく、unknown, doorknob のような複合語・接頭辞付きの語でも k は黙字のまま。know/no, knew/new, knight/night, knot/not のような同音異義語を生む。
wr	/r/	write, wrong, wrist, wrap, wrench	語頭の wr- では w を発音せず /r/ だけを読む。現代英語ではほぼ例外のない規則で、shipwreck, handwriting のような複合語の中でも同じ。write/right, wrap/rap, wring/ring, wrote/rote など同音異義語が多い。
mb	/m/	lamb, thumb, comb, climb, crumb	語末の -mb では b を発音せず /m/ で終わる（lamb, thumb, climb）。-er, -ing などの接尾辞が付いても黙字のまま（climber, plumber）。一方、number, member のように音節の切れ目をまたぐ mb は b を発音する。
gn gh h t l		sign, gnome, gnaw, design, ghost	英語には綴りに残っているが発音しない黙字（silent letter）が多い。代表的なのは gn（sign, gnome の g）、gh（daughter, eight の gh、ghost の h）、一部の語の語頭の h（hour, honest, honor）、-sten / -stle の t（listen, castle）、-alk / -alm / -alf の l（walk, calm, half）。多くは昔は発音されていた音の名残で、sign / signal のように関連語で黙字が復活することもある。
y	/iː/	happy, baby, candy, puppy, bunny	2音節以上の語の語末の y は、強勢がなければ /i/（happY の母音）と読む（happy, baby, city）。1音節語の語末 y（my, fly）や強勢のある語末（apply）は /aɪ/ になる。このサイトでは ee と同じ /iː/ で表記しているが、実際は語末なのでやや短めに発音される。
y	/aɪ/	fly, sky, cry, my, by	母音字がほかにない1音節語の語末 y は /aɪ/（my, fly, sky）。多音節語でも、語末の音節に強勢や第2強勢がある場合は /aɪ/ になる（apply, reply, satisfy, -fy, -ply）。強勢のない語末の y は /i/（happy）。

家庭・教室での印刷は自由です（再配布・販売はご遠慮ください）

Phonics 図鑑 フォニックス・ルール早見表（全98ユニット）

左の色＝ステージ

つづり	音	例	ルール
tch	/tʃ/	watch, catch, match, hatch, kitchen	短母音の直後（主に1音節語の語末）の /tʃ/ は tch と綴る（catch, itch, fetch）。長母音や子音のあとでは ch になる（teach, lunch）。t は独立して発音されず、ck や dge と同じく「直前の母音が短い」ことを示す綴りの工夫。much, such, rich, which などが代表的な例外。なお、この規則が当てはまるのは主に強勢のある1音節の語（語幹）で、sandwich, ostrich, spinach のような強勢のない語末音節は短母音のあとでも ch。attach, detach（フランス語由来）も ch。touch, couch のように母音を2文字で書く語も ch（touch は発音は短い /ʌ/ だが、綴りが母音字2つなので tch にしない）。
dge	/dʒ/	bridge, badge, fridge, porridge, hedgehog	強勢のある短母音の直後（主に1音節語の語末）の /dʒ/ は dge と綴る（badge, edge, bridge, judge）。長母音や子音のあとでは ge になる（cage, huge, change, hinge）。d は独立して発音されず、tch の t や ck の c と同じく「直前の母音が短い」ことを示す綴りの工夫。1音節語ではほぼ例外がないが、強勢のない語末の /ɪdʒ/ は village, cabbage, college のように -ge と綴るのがふつう（knowledge はむしろ少数派）。
-le	/əl/	apple, table, candle, bottle, turtle	語末の「子音＋le」は1つの弱い音節 /əl/（実際には母音のない成節子音 [l̩] になることも多い）を作り、e は読まない。前の母音が短母音なら le の前に子音字を2つ置いて閉音節を保ち（little, bubble のように重ねるか、candle, jungle のように別の子音字）、長母音なら子音字は1つ（table, needle）。語末の l なので、舌の奥が持ち上がる「暗い L」[ɫ] になる。
-tion -sion	/ʃən/ /ʒən/	station, lotion, potion, nation, action	語末の -tion は1つのまとまりとして /ʃən/ と読む（例外は s のあとの -stion /stʃən/ くらい）。-sion は子音字の後（mansion, tension）や -ssion では /ʃən/、母音字の後（vision, decision）では有声の /ʒən/ になる（米音では version, excursion のように r の後も /ʒən/ が多い）。強勢はふつう -tion/-sion の直前の音節に来る（vacátion, informátion。ただし米音の télevision のような例外もある）。
-ture	/tʃər/	picture, nature, future, adventure, creature	語末の -ture は1つのまとまりとして /tʃər/ と読む（強勢は置かれない）。t と後ろの /j/ が融合した結果で、規則性は非常に高い。例外は強勢が -ture に来る mature など少数。
-ed	/t/ /d/	jumped, kicked, looked, helped, washed	過去形・過去分詞の -ed は直前の音で読みが決まる。無声音（/p k f θ s ʃ tʃ/ など）の後は /t/（jumped）、有声音・母音の後は /d/（played）、/t/ /d/ の後だけ /ɪd/（米音では /əd/ とも）で1音節増える（wanted）。綴りではなく直前の「音」で判断する（mixed の x は /ks/ なので /t/）。

家庭・教室での印刷は自由です（再配布・販売はご遠慮ください）

Phonics 図鑑 フォニックス・ルール早見表（全98ユニット）

左の色＝ステージ

つづり	音	例	ルール
-s -es	/s/ /z/	cat**s**, book**s**, cup**s**, hat**s**, duck**s**	複数形の -s/-es は直前の音で読みが決まる。無声音（/p t k f θ/）の後は /s/（cats）、有声音・母音の後は /z/（dogs, bees）、歯擦音（/s z ʃ ʒ tʃ dʒ/）の後は -es /ɪz/ で1音節増える（boxes, oranges）。三単現の -s、所有の 's も同じルール。
wa war	/ɑ/ /ɔːr/	**wa**sh, **wa**nt, **wa**tch, s**wa**n, **wa**nd	w（および qu /kw/）の直後の a は、唇の丸めの影響で /æ/ ではなく /ɑ/ になることが多い（wash, want, squash）。英音ではここが唇を丸めた /ɒ/ で、カタカナの「ウォ」はそちらに近い。米音でも wash, want, water を /ɔː/ で言う話者がいる。war- では /ɔːr/ になる（warm, dwarf, quarter）。ただし後ろに g, k, ng, x が来ると /æ/ のまま（wag, wax, quack, twang）。
al all	/ɔː/	b**all**, t**all**, w**all**, c**all**, f**all**	語末の -all と、al＋子音（salt, bald, also, always）では、a は /æ/ ではなく /ɔː/ になることが多い（all, ball, salt は /ɔːl/）。さらに -alk では l が発音されず /ɔːk/（walk, talk, chalk）。ただし pal, shall, valley, album, alphabet のように /æ/ のままの語も少なくない。米音では /ɔː/ を /ɑ/ と同じに発音する地域も多い（cot-caught の合流）。
a e i o u	/ə/	b**a**n**a**n**a**, sof**a**, pand**a**, pizz**a**, zebr**a**	強勢のない音節の母音は、綴りが a, e, i, o, u のどれであっても弱化してあいまい母音 /ə/（シュワ）になることが多い。英語で最も頻度の高い母音で、綴りからは予測できないため、語の強勢位置とセットで覚える必要がある。
ough		th**ough**, d**ough**, d**ough**nut, alth**ough**, thr**ough**	ough には単一の規則がない。アメリカ英語の主な読みは6通り：/oʊ/ though（thorough, borough の語末も米音ではふつう /oʊ/）, /uː/ through, /ʌf/ rough, /ɔːf/ cough, /ɔː/ thought, /aʊ/ bough。これに英音の thorough の /ə/ と、hiccough の /ʌp/（hiccup の別つづり）を加えると8通り。「いくつあるか」は、どの方言・どの単語まで数えるかで変わる。いちばん頼れるのは -ought の /ɔːt/（bought, brought, fought, thought）で、残りは語ごとに覚える。
the a I to		a, I, the, to, do	最頻出の機能語は、古い発音が残ったり弱く読まれたりした結果、綴りと音がずれているものが多い。ただし全体が不規則なわけではなく、ずれているのは1〜2文字だけのことが多いので、「どこがトリッキーか」を意識して覚えると定着しやすい。

家庭・教室での印刷は自由です（再配布・販売はご遠慮ください）

フォニックス・ルール早見表（全98ユニット）

つづり	音 例	ルール
said was	was, said, says, they, have	said / says、come / some / love、put / push / pull / full のように、同じずれ方をする語をグループで覚えると効率がよい。多くは「よく使うので短く・弱く発音されるようになった」「綴りが固まった後に発音が変わった」のどちらかが理由。
could would	could, would, should, does, other	綴りがほぼ固まった15〜16世紀以降に発音が変わった語や、学者がラテン語などに似せて文字を足した語（debt の b, island の s）、仲間の語に形をそろえて文字を足した語（could の l）は、綴りと音のずれが大きい。could / would / should のように同じ形のグループで覚えるのが近道。

家庭・教室での印刷は自由です（再配布・販売はご遠慮ください）